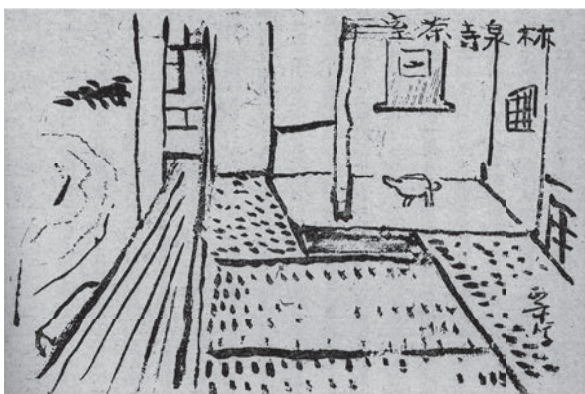


一 はじめに

平成二十年四月五日にオープンした碧南市藤井達吉現代美術館も、はや五年の月日が過ぎた。館長として着任前、私は碧南という町について、臨海部の工業そして農業、漁業とバランスのとれた財政基盤を持つ経済的に恵まれた地域であると理解していた。美術などの文化的なものとしては、我が国の近代美術工芸において前衛的な活動を展開し、当時の美術界を席巻した藤井達吉（一八八〇年～一九六四年）の生誕の地であることや、全国的にも早い段階からの「彫刻のあるまちづくり」〔註一〕、今日でいうパブリック・アートに着手した地域であるという認識のみを持っていた。ところが、着任後この地域の歴史や文化を学んでいくうちに、多くの文化人や芸術家がこの地と深い繋がりを持っていることや、優れた文化的遺産が存在することを知ったのだ。この小論ではこれまでの五年間の知見や体験などをもとに、この町が記憶すべきと考える美術関係の事柄を述べるものである。記述は明治から昭和の戦後までを大きく「人物」と「動向」の二つの分野に分け構成している。

なお、この小論は『中日新聞』の文化欄に掲載された拙稿の「碧南からの文化発信」〔註二〕を基底としており、紙面の関係上割愛した内容や新たに判明した事柄などを加筆したものである。



挿図1 正宗得三郎《林泉寺茶室》

二 人物

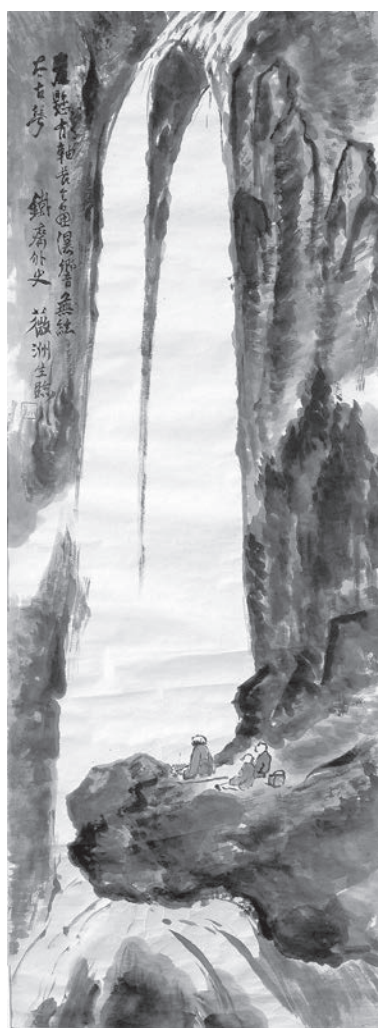
明治以降の特筆すべき人脈のひとつに、幕末から明治にかけて活躍した国学者であり芸術家でもあった山中信天翁（一八三年～一八八六年）を中核とする系譜が挙げられる。碧南市教育委員会発行の『郷土の先賢 山中信天翁遺墨集』^{〔註3〕}によれば、山中信天翁は文政五年に現在の碧南市東浦町で沼津藩水野家の御用達であった素封家・山中七左衛門（有功）と南登の二男として生まれた。諱を獻、字を子文といい、信天翁は号であり別に静逸などもあった。少年期から大阪で漢学者の篠崎小竹に学んでいたが、二十七歳の時、父・七左衛門が亡くなったため帰郷。長兄は夭折していたため信天翁が家督を継ぎ四代目七左衛門を襲名したのであった。そののち、弟の三男・猗に家督を譲り、国事に奔走するのであるが、この国事に奔走する頃に出会ったのが陽明学を春日潜庵^{〔註4〕}に学んだ梅田雲浜や頼三樹三郎らの勤皇の志士たちであった。この志士たちとの交流の中で知り合ったのが、のちに最後の文人画家と称される富岡鉄斎である。

鉄斎は信天翁と比べると年齢的には一回り以上も若かったが、明治八年に奈良で開催された博覧会見学や東大寺での正倉院御物を共に拝観する^{〔註5〕}など、その親密な交流は生涯にわたるものであった。なお、鉄斎に対して画家として身を立てるようにと勧めたのは信天翁だったと伝えられている^{〔註6〕}。また、鉄斎は晩年まで信天翁の遺髪が埋葬された京都南禅寺天授庵の墓参りを怠らなかつたと言われており、明治二十二年と二十八年の二回にわたり信天翁の故郷である碧南を訪れている^{〔註7〕}。鉄斎が碧南を訪れた経緯は、信天翁の高弟の石川三碧（現・碧南市）の招きによるものである。他に高弟といわれる人物には中埜半左衛門（現・半田市）、盛田久左衛門（現・知多市）と田島五郎作（現・高浜市）がいた。

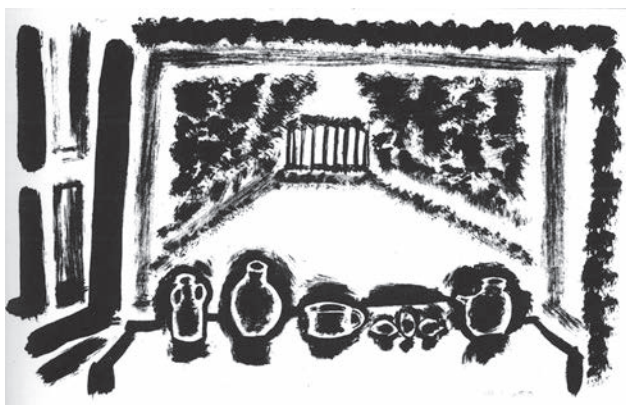
昭和の時代に入ると、当時の二科会を代表する洋画家の正宗得三郎（一八八三年～一九六二年）が昭和十六年に碧南へ訪れ、林泉寺や三碧の遺族のもとで鉄斎に関する調査を行っている。^{〔挿図1〕} 正宗得三郎は鉄斎とは生前から交流があり、その芸術に対して早くから理解を示した作家である。鉄斎の死に際して「私の見、聞き、接し得し人のなかで、一言一行も芸術の片鱗、味わいの飽く事を知らない人は現代日本で唯鉄斎先生一人であった」^{〔註8〕}と最大級の弔辞を寄せてもいる。また、鉄斎の芸術に対しても「老境になればなる程味わいが深く、人も作品も蠱惑^{こわく}の魅力に加え、筆触は

金石文字の如く正しく、また千古の雅趣と新鮮さを具備しておられました」と賛辞を述べている。

正宗は岡山県備前市穂浪の旧家の三男として生まれており、長兄の忠夫（白鳥）は文学者、次兄の敦夫は国文学者として知られている。正宗自身は画家を志し、十九歳の時に上京。はじめは、寺崎広業の画塾で日本画を学ぶが、のちに洋画へ転じ東京美術学校西洋画科選科に入學。白馬会展や文展、琅玕洞での個展などでその画業が注目されるが、大正三年に渡仏し、モネやルノワール、ゴッホ、マティスなどの影響を受け、戦前の二科展や戦後の二紀展などで活躍したのであった。また、正宗は鉄斎に関しては先駆的な研究者として知られており、昭和十七年に『富岡鉄斎』（註9）を上梓している。ちなみに正宗には「薇洲」という雅号があるが、これは鉄斎から貰ったものである。なお、正宗がいかに鉄斎に心酔し鉄斎研究を行ったかは、正宗家から碧南市藤井達吉現代美術館にご寄贈いただいた作品（挿図2）から推察できるといえる。



挿図2 正宗得三郎《鉄斎外史 薇洲生臨》
紙本墨画



挿図4 伊藤廉《窓辺の静物》墨素描



挿図3 伊藤廉《船大工》油彩、キャンバス 1928年

さて、山中信天翁との血縁関係において繋がりのある人物としては、愛知県立芸術大学の創設時において美術学部長に就任し、画家としてまた教育者として活躍した伊藤廉（一八九八年～一九八三年）がいる。

伊藤は画家としての活動はいうまでもないが、一方で『セザンヌ覚書』や『絵の話』『デッサンのすすめ』などの著作において優れた文筆の才を発揮していた。伊藤廉の父・四郎は碧南の出身で、山中家から名古屋の伊藤家へ養子となった人物である四郎の実父、伊藤廉にとっては祖父が五代山中七左衛門（猗）であった。つまりその祖父の兄が信天翁にあたるのである。このことは碧南に来てから伊藤廉の親戚筋の方から教えていただいていたことではあったが、あらためて伊藤廉監修の画集で年譜を確認したところ、信天翁系譜として伊藤廉が繋がっていることが確かに記載されていた。かねてから伊藤の豊かな文才について、その才能はどこから来るのか不思議な思いがしていたが、国学者である信天翁との関係が明確となった現在では、そのルーツを発見した感がある。これは単に文才のみではなく、伊藤廉の画業の展開においても、信天翁や鉄斎が描いた墨画の世界と一脈通じるものを感じ取ることが出来るのである。例えば、フランスに渡りセザンヌやジョルジュ・ルオーの影響を受けたといわれる《肘を突く女》（愛知県美術館所蔵）や《船大工》（挿図3）（碧南市藤井達吉現代美術館所蔵）などは、確かに絵肌やフォルムの捉え方においてその影響を感じることが出来るが、一方で筆致の点においては前述のルーツを知ったためか信天翁や鉄斎の描画がもつダイナミックな描法と共通した波長を感じるのである。さらに戦後、それも後期に手掛けた一連の墨素描（挿図4）による作品群は、骨太な水墨山水の世界をイメージさせるのである。かつて伊藤は、六十六歳の時ユネスコの日伯文化交流会議活動小委員会の調査委員としてブラジルのサンパウロに出張した。その折に「鉄斎・風土・湿潤性」と題して水墨画の世界について講演を行っている（註10）。その講演では、鉄斎作品とセザンヌ作品を比較検討し描画に用いる素材や描く環境などの違いが表現に大きな影響をあたえていることを語っており、あらためて信天翁、鉄斎、伊藤廉と続く絶えることの無いひとつの芸術上の崇高な精神の流れを感じるのである。

なお、この他にも碧南の出身で大正から昭和にかけて日本の図画教育の方面において大きな足跡を残した板倉賛治（一八七七年～一九六五年）や、碧南の出身ではないがかつて碧南にあった三ッ鱗練



挿図5 行動美術協会 集合写真(解説)



挿図5 行動美術協会 集合写真(妙福寺にて)

炭で絵付けに訪れていた洋画家の真島健三(一九二六年～一九九四年)などがいるが後日の調査研究報告とする。

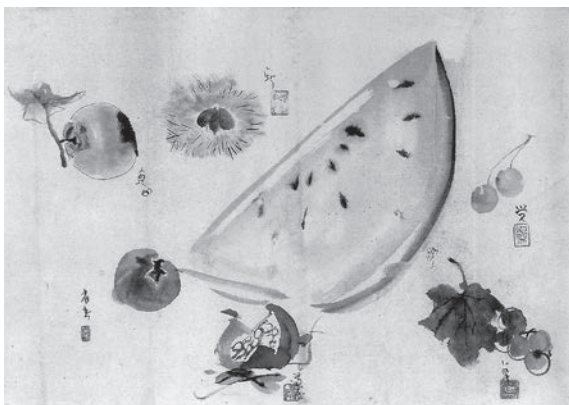
三 動向

さて、碧南において美術にかかわる特記すべき動向としては、第二次大戦後の中央美術界の展開に少なからず関わりがあったことが挙げられる。中央美術界の新たなスタートは、敗戦の混沌と荒廃のなか戦時中軍部によって統合や解散させられた美術団体の編成から始まり、その主要な美術団体のひとつが碧南で結成されたのだ。先鞭をつけたのは、川端龍子が主宰する青龍社であり、昭和二十年十月に日本橋の三越百貨店において戦後初めての団体展を開催した。続いて、同月には在野の最有力団体二科会が旧二科会の在京会員が中心となって再結成を表明している。しかし、旧会員の榎倉省吾、古家新、伊谷賢蔵、柏原寛太郎、小出卓二、向井潤吉、田辺三重松、田中忠雄、高井貞二らは再結成を潔しとせず、十一月に二科会から分離し「行動美術協会」を結成したのである。『行動美術協会三十五年の小史』(註1)によれば、その誕生の地が碧南であったとされているのだ。なお、二科会は翌二十一年に第三十七回展を開催するが、二十二年には第二回日展への参加をめぐって内部において意見が対立し、不参加を主張した黒田重太郎、田村孝之介、中川紀元、鍋井克之、正宗得三郎、宮本三郎、横井礼以外の会員は退会し「二紀会」を設立している。

さて、話を元に戻し何故碧南が行動美術協会の誕生の地なのか、『行動美術三十五年の小史』では口絵(挿図5)の説明として次のように記述されている。

「ココニ行動美術協会結成ス

愛知県碧南棚尾の妙福寺という大きなお寺へ少しむくんだ顔の、異様な風体の男が七人、リュックをかついで東と西からたどりついたのが行動美術協会というものの形をととのえようとした最初の集まりであった。岡崎市の小野英一という篤志家と、妙福寺の加藤良信和尚の奉仕的な好意によって事を忘れてはならない。・・・田辺、田中は、その頃は万里の果ての距離ともいえる北海道にあ



挿図6 妙福寺に集合した画家たちの寄せ描き

った。・・・(創立10周年記念号“行動” 古家新追悼文より) 当時の東海道線は鈍行だけで車窓から乗降する客は網棚から屋根の上まで溢れた。〈万里の果ての北海道〉も誇張でなく、東西の中間棚尾を選んだ意味も痛いほどよく解る。」(原文)

何故碧南の地に集合したのかについては、この説明文から推測されたとおり、終戦も間もない頃で、会合を開こうにも交通事情や宿泊施設のことを考慮に入れば、戦災で空虚と化した東京に各地から集まるよりは、東西からの中間地点に集合した方が集まりやすいという判断があったようだ。この発案は榎倉省吾によるもので、榎倉はかつて岡崎市で個展を開催した折に懇意にしてみらった小野印房の小野英一が存在を念頭に提案したのであった。この小野英一は、当地の創作版画運動の先駆者ともいえる近藤孝太郎が創刊した『試作』に同人として参加するなど美術に造詣の深い人物であった。そして、小野と榎倉との出会いは、榎倉が昭和十六年に岡崎市立図書館で個展を開いた時と推測される。この時以来何かと世話になり、以来交流が続いていたという。小野に相談した結果、榎倉とも個展の折りに面識のあった碧南の棚尾にある妙福寺(註12)の住職・加藤良信和尚に集合会場の提供を依頼することとなり、結果として歴史的に碧南が「行動美術協会発祥の地」となった所以である。当時の状況を付記すれば、岡崎も終戦近くの七月二十日の空襲で被災しており、集合場所の確保は困難なところであったと思われる。その点、幸いにして碧南は戦災を免れており、さらに妙福寺には大人数が寝泊まりできる宿坊があり、会合にはうってつけの場所であったといえる。

碧南での会合は、昭和二十年十一月一日で行動美術協会の創立会員九人中七人が各地から列車を乗り継いで妙福寺に集まった。そのメンバーは、東京から榎倉省吾、向井潤吉、柏原覚太郎、高井貞二、関西方面からは古家新、伊谷賢蔵、小出卓二であった(挿図6)。さすがに北海道の田中忠雄、田辺三重松は集まることが出来なかったようだ(註13)。なお、その当時の記録としては冒頭の口絵の集合写真があるが、その写真を見ると一同何処かの温泉宿に宿泊しているような浴衣姿で納まっている。時代背景を考えると、何か不思議な違和感を覚えたが、妙福寺に宿坊があったという事実を知り、腑に落ちたのであった。

さて、ここでの会合を終えた一同は、十一月五日付けで各美術関係者あてに「行動美術協会結成の辞」を右記九人の連名で送付している。その趣意書には「二科会は前年に解散に至るべくして解

散した旧二科会の復活には何ら期待するところがない」と明記している。これはどういう事かと言うと、前年の解散時に戦争の終末まで活動を休止する案と栄光に充ちた歴史を汚すことなく一挙に解散しようとする案が出され、結局のところ解散が採択されたのである。ところが、この決議が反故にされ旧二科を復活させようとする一部の旧幹部が独断的に先行したため、向井や榎倉、柏原伊谷、古家らが不信に思い相互の連絡をとりつつ新たな団体の創生へと話が展開したのであった。この創立会員となったメンバーの共通することは、九名中八名が戦争末期に結成された軍需生産美術推進隊の隊員であったことである。推進隊は炭鉱などの生産工場に出かけ壁画や生産風景を描くことが任務であったようで、ここに参加した人々には目に見えない強い連帯意識があったようだ。

戦後、多くの有能な作家を輩出した「行動美術協会」。その誕生の地が碧南であった事実は、碧南の戦後史のひとつとして記録すべきことと考える。なお、余談であるが本稿に登場する小野印房の小野英一は藤井達吉の落款用の印を数個制作している。又、戦後の現代美術の展開で重要な足跡を残した榎倉康二は、榎倉省吾の長男であり、本市の野外彫刻《碧南》の作者である向井良吉は、向井潤吉の弟である。

四 むすび

美術館のある大浜地区は室町時代から太平洋側の海運の要地として開けた地域である。また、この地区は仏教界の名だたる宗派の寺院があり、他の地では見ることのできない独特な寺町を形成している。

また、美術関係以外の人物においても明治の宗教哲学者として知られる清澤満之（一八六三年～一九〇三年）の終焉の地でもあり、明治から昭和初期にかけて「無我愛」を提唱した哲学者・伊藤証信（一八七六年～一九六三年）もゆかりの人物である。ゆかりといえば岸田劉生の絵のモデルとなった医学博士・近藤次繁も碧南の鷺塚において地域医療に一生を捧げた近藤坦平の娘婿であった。さらに、文学関係では文豪・永井荷風の御先祖が碧南の出身の戦国武将・永井直勝であったことも当地において知り得たことである。

「碧南 美術逍遙」と題したこの小論は当地域の美術文化の一部に触れたものであり、今後の調査や知見によりさらに充実していきたいと考えている。

- 1 昭和五十八年から平成七年にかけて碧南市が実施した事業で、市内の各地に多くの野外彫刻を設置してきた。特色としては既に出来上がった作品を設置するのではなく、依頼を受けた彫刻家が設置場所の環境に合わせて制作するというもので、オーダーメイドの現場主義による作品群となっている。
- 2 平成22年7月22日付『中日新聞』（夕刊）文化欄に掲載された「碧南の文化遺産」。
- 3 昭和56年3月31日碧南市教育委員会発行の碧南市文化財第四集。
- 4 陽明学に精通し、孝明天皇にも顧問として使えた人物。
- 5 昭和17年12月10日錦城出版社発行『富岡鉄斎』『富岡鉄斎の旅日記に就いて』正宗得三郎
- 6 平成成15年発行『あるコレクターが見た画業七十年 富岡鉄斎展』『関事項解説集』（愛媛県美術館・梶岡秀一）において幕末の鉄斎の友人としては山中静逸（信天翁）が挙げられ、彼が鉄斎に画家になることを勧めたと論じている。
- 7 昭和17年12月10日発行の『富岡鉄斎』『年譜』から。
- 8 平成8年9月27日発行『富岡鉄斎展―理想郷を語る―』『画家たちが見た鉄斎』（愛知県美術館・木本文平）
- 9 この本の上梓のため昭和16年に正宗得三郎は碧南に訪れ、林泉寺や石川三碧の遺族を調査をしている。
- 10 昭和56年12月20日発行『伊藤廉画集』『I鉄斎・風土・湿润性』（名古屋日動画廊）
- 11 昭和55年11月25日発行、向井潤吉、難波香久三が編集。
- 12 天正18年創建の浄土宗西山深草派の寺院で、本尊は阿弥陀如来。
- 13 平成13年9月30日朝日新聞社発行『心月輪 画家 榎倉省吾伝』『IV二科』黄田光。